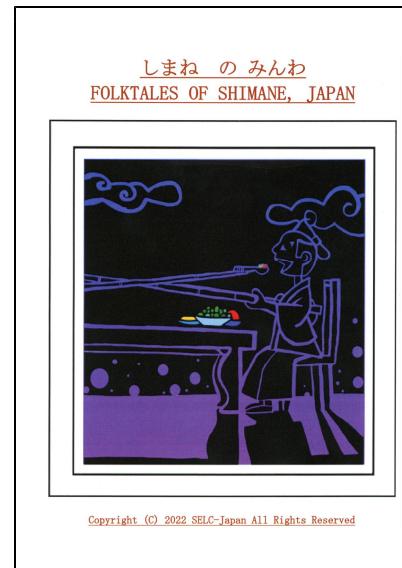


ケンブリッジ大学図書館が筆者の島根の民話5話を収蔵することに

酒井 董美（ただ よし）



メール添付で送られてきた本の表紙

12月3日、神奈川県逗子市山の根にお住まいの石川千秋氏から連絡があり、筆者が収録した島根の民話の一部が、ケンブリッジ大学図書館に置かれ、ウェブサイト上にも登載されるとのことだった。

数年前、資料を送つておいたのが、実現するようになつたのである。翻訳は英語、アラビア語、スペイン語、フランス語、ウクライナ語、ドイツ語の6カ国語であり、収録されている話は、次の通りであつた。

- ①大判が怖い話＝松江市八束町・足立チカさん(1894年＝明治27年生)
- ②むすびを食べた地蔵様＝鹿足郡吉賀町・小野寺賀智さん(1890年＝明治23年生)
- ③海老と大鳥＝浜田市三隅町・西田丈市さん(1893年＝明治26年生)
- ④若返りの水＝隱岐郡知夫村・小泉ハナさん(1890年＝明治23年生)
- ⑤地獄と極楽＝隱岐郡海士町・前田トメさん(1914年＝大正3年生)。以上の5話である。

一話ごとにQRコードもつけられ、伝承者の声が聞ける、福本隆男君のイラストつきで、A5判で42ページの分量である。

まさか」のような展開が今頃になって起きようとは、まさに「神ならぬ身の知るよしもなし」であった。

石川氏の話では、イギリスで子どもたちに島根の昔話を話すと、次々と話をせがまれるという。子どもたちにとって「どの国」でも昔話は興味深いものらしい。なるほど昔話は祖先たちが語り継いできた無形民俗文化財なのである。おもしろくないはずがない。こうして子どもたちが大きくなれば、次々語り手になり、また子どもたちに語り継いでいく。このような連鎖が続いてゆくのであろう。

ところで、イギリスのケンブリッジ大学といえば、大学の中でも歴史を誇る名門中の名門である。石川氏の連絡によれば、そのラウラ・モレッティ教授が関心を示しておられるそうである。そして作成された『島根の民話』がメールで添付されて送られてきたのであった。石川氏は「資料は手元に残つてるので、せつかくならば我が家の和紙で印刷した本にして、ケンブリッジ大学の図書館に複数冊送るようにしたらどうかと思います」と話しておられたが、イギリスの名門大学の図書館に和紙で印刷された『島根の民話』が収蔵されたら、文化交流の観点からも大きな意義があるようには思えてならない。

筆者が口承文芸の収録を始めたのは、1960年(昭和35年)からなので、もう65年も前のことになつてしまつた。半世紀を優に超えてしまつて。そしてこのたびヨーロッパの研究者の目にとまつて、そのうちの島根の民話5話が6カ国語に翻訳され、イギリスのケンブリッジ大学図書館に納められ、ウェブサイト上にも活用されるのである、「このようなことは、当初想像すらしていなかつたことである。長生きはするものだとしみじみ思う90歳の筆者なのである。(一九七〇年玉川大学文学部卒業—通信教育—元島根大学法文学部教授)

